

「潮騒」

作・朱時正時

玄関扉を開けるなり、彼女の舌が強引に口へ割り入ってきた。

そんな気分ではないと舌先で押し返そうとしてみたが、柔らかくひんやりと濡れた舌先は誘うようにわたしの舌を包み込み、絡みついた。

寂しかった。

と口で言うより雄弁に、舌は執拗に、物欲しげにわたしの口の中を蹂躪する。反撃する隙も与えられずに唇で舌を強く吸われて、わたしの意識は白み、力が抜ける。

こうなるとなされるがまだ。

そのまま玄関マットに押し倒されて、いつの間にかブラウスのボタンを外される。

スーツ、皺になっちゃう。

そんな不安混じりに見下ろせば彼女はもう、わたしのブラのホックを外し、猥音を立てながら乳房を夢中で食んでいる。

「んっ……」

濡れた乳首に八重歯を突き立てられ、不意に声がこぼれる。瞳が潤む。

「はぁっ……んっ……アァッ」

スイッチが入ったように体が火照り始める。

肌が淫らになっていくのがわかる。

スカートやストッキングさえ纏っているのがもどかしい。

熱い。もっと触って。

そう願った矢先。

彼女が口を開く。

「リサ！　大好きよ！　どこにもいかないでねリサ！」

妹の名前を何度も何度も呼びながら、彼女はわたしの体を骨の髄まで味わい尽くそうと下半身へ唇を這わす。

今の彼女はわたしを見ていない。

リカの中のリサ。

わたしの中に残った妹の影を見ているのだ。

わたしと妹は双子だった。

仲のよい姉妹だったと今では思う。

着るものも、髪型も、遊ぶものも、趣味も一緒だった。

そうあるのが自然だったし、はじめは実際にそうだった。けれどある時からわたしは、妹へ似せていった。

妹と居るのが居心地よくて、偶然を装って好みを合わせていった。それは意図的ではあったけれど幸福な時間で、いつまでも続くと思っていた。

中学生になったとき、好きな人ができた。
好きになった人が好きになったのは妹のリサの方だった。
わたしはそれから、リサを遠ざけるようになっていった。

高校生のとき。わたしは彼女、北本雫と出会った。
同じ美術部で長い時間をかけて何枚も互いの姿をデッサンしていくうちに、わたしは雫に惹かれていった。雫の顎から耳にかけての美しいラインを鉛筆で描く度、そこへ指を這わせたくてたまらなかった。もしもそこへ触れることができたならどんな表情をするのだろうと、あらぬ妄想にも囚われた。雫と親友以上になりたいと、いつしか願うようになっていった。

そんな気持ちが押さえきれなくなったある日、わたしは雫に告白して無惨に振られた。
雫には好きな人がいた。
それは妹のリサだった。
私だって同じ顔なのに、なぜ？
そんな気持ちが憎悪となってわき上がり、私はそれからしばらく登校拒否の引きこもりになった。
荒れた部屋の中で毎日デッサンのなかの彼女を眺めながら、オナニーにふけるだけの日々が無為に過ぎていった。
引きこもりになって一ヶ月後、リサから雫をつたと伝えられた。
理由は「リカのことをする女は好きになれない」だった。
死のうと思っていた矢先、わたしは呆氣にとられてなにもかもバカバカしくなって不登校をやめた。
わたしはリサに救われた。

数年後、わたしは雫から告白された。
訳はわからなかったが、リサを好きになったのはリサの中の「わたし」に惹かれたからで、そのことに気がついたらしい。
雫への想いは変わっていなかったから、わたしはそれを受け入れた。
デートを重ね、唇を重ね……体を重ねた。
朝帰りしたその日、リサが家からいなくなった。
何日も家に戻らず、連絡もなかった。
警察に捜索願を出して少しして、リサは見つかった。
幼い頃、家族旅行でよく行っていた海水浴場で水死体となって発見された。
状況からみて自殺だった。
わたしが自殺を考えるほど雫を想っていたのと同じように、リサもわたしを想っていたのだ。
もっと真摯に向き合ってあげれば良かったと後悔に押しつぶされそうになった。
けれどわたしより、雫の方が深刻だった。
わたしとつき合ったことで、リサを殺してしまったと自分を追いつめ、雫の心は壊れてしまった。
雫は時々わたしとリサを混同するようになった。
彼女の中ではまだリサは生きていた。
求められるまま、わたしは雫の言葉に合わせてリサを演じる。

リサが、もしまだ生きていたなら……どんな風に成長したか、どんな風なものを好んだのか……わたしは居ない人間に似せて、一人芝居を演じている。

「ヒッ……だめっ、私はお姉ちゃんとしか……」

わたしは快楽に名残惜しさを覚えながらも、雫を突き放そうと試みる。リサならきっとそうするから。

「リサあ、気持ちよくなかった？」

「それは……ッ」

答える前に雫の唇が秘裂に押し当てられる。柔らかな唇は吐息を漏らしながら、わたしの淫唇を愛撫する。唇から熱が伝わり、わたしのほども充血し、とろりと蜜がにじみ始める。

ふと、尖らせた舌先が秘奥へ忍び込んだ。濡れた肉襞を削ぎ取るように舐めあげられる。電撃に似た快感で体が一気に痺れてしまう。

脱力してなおも、鋭く柔らかいタッチが責め立てるようにわたしの中をかき乱す。

「ちゅっ。じゅっ。じゅぶっ」

「雫さんっ……ダメっ、私は、お姉ちゃん、しかっ」

「じゅるっ……ちゅばあっ……リサあ、私、リサのお姉ちゃんの彼女だよ？ お姉ちゃんのアソコを舐めた舌でリサを愛してあげる。私のこと、お姉ちゃんだと想っていいから、続けさせて……」

「そんなの……」

そんなのおかしい。

わたしがリサで、雫がわたし。

どんな風に想って応えればいいのか？

「ぴちゅっ」

愛液にまみれた雫の唇が、わたしの陰核に押し当てられる。脳天を砕くような快楽に体がこわばり、痙攣する。

「あっ、ダメ。しずく、さんっ」

唇で剥かれ、むき出しになった陰核に雫の舌が触れる。

快楽の予兆が大きな波となって体の奥へ押し寄せる。

「ヒッ、お姉、ちゃんっ。ダメ……っ」

陰核が舌で弾かれる。

「アっ、お姉、ちゃん！ お、姉ちゃん！ あっ。アッ……くる！ キちゃう！」

頭の中が沸騰して何を言っているのか自分でもよくわからない。

体の痙攣が大きくなる。

浮いた腰を逃すまいと、雫の唇が陰核を吸い上げた。

「んあッ……あっ、ふああああんっ！」

体が堪えきれずに弓なりになり、淫汁を噴き出す。

飛沫が頬にかかり、雫がニヤリと笑みを浮かべた。

「良かったでしょう？ リサ。お姉ちゃんとのエッチは」

「んはあっ……うん……」

体に残る熱に微睡みながら、わたしは雫を見上げていた。

「リカ。私、昨日のこと覚えてないんだけどひょっとしてまた……」

雫が青ざめた顔でシーツの上をすり寄ってきた。

「いいよ。気にしないで」

「でも……」

息苦しそうな表情の雫を見ていられなくて、誤魔化すように唇を塞ぐ。

「次の休み、また海にお線香立てに行こうか？」

「……そうね」

縮こまった雫を、わたしは細い腕で抱き寄せた。わたしと雫のことをおもんぱかって、海へ消えてしまった優しいあの子のことを思いながら。

了